

論 文

Twelfth Night における双子の配役についての一考察

辻 英 子

同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・准教授

A Study on the Casting of the Twins in *Twelfth Night*

TSUJI Hideko

Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

Abstract

The plays of William Shakespeare have been directed in various ways over time. Especially after the Restoration period, Shakespearean performances have greatly changed from their original style due to the advent of actresses and changes in stage structure. Although some attempts beginning in the early 20th century have been made to return to the original theatrical style of Elizabethan times, it is impossible to perfectly reproduce the original stage conditions. What we should do today is explore the diversity of Shakespearean performance through close investigation of the original text. In this paper, I would like to examine Shakespeare's comedy, *Twelfth Night*, and consider how the text has been interpreted and embodied on stage focusing on the casting of twins in the play.

序

William Shakespeare (1564-1616) の戯曲は時代と共に様々な演出のされ方をしてきた。とりわけ王政復古以降、女優の参入や舞台構造の変化、舞台技術の発達、台本そのものの改作などにより、Shakespeare 当時とは異なる状況の中で、実際の上演はオリジナルテキストからは大きくかけ離れたものになってきた。20世紀以降、William Poel (1852-1934) の演出を嚆矢とするような Shakespeare 当時の舞台状況に可能な限り近づこうとする試みも次々となされてはいるが、過去の忠実な復元は不可能であると同時に、ともすれば、Shakespeare の

舞台を博物館化し時代錯誤で生命力に欠けたものにしてしまう可能性があることも否めないだろう。今日の Shakespeare 上演は、残されたテキストの精緻な分析と先人達の試みを糧としながら、21世紀にふさわしい新たな解釈の可能性を探っていくべきであることは言うまでもない。

本稿では、今日の Shakespeare 劇の演出とオリジナルテキストとの関係を喜劇 *Twelfth Night* (『十二夜』) を取り上げ考察する。残された台本の中で示唆されていることが、今日、舞台ではどのように表現されているのか、そしてそれらの解釈は、Shakespeare 自身が当時の演劇状況の中で意図したであろうことと、ど

のように異なっているのかを、作品の中の、男女の双子である Viola と Sebastian の配役に焦点を当てて考えてみたい。

I

まず、最初に確認しておきたいのは、*Twelfth Night* に登場する Sebastian と Viola という男女の双子がオリジナルテキストでどのように設定されているかということである。この双子を配役するにあたって我々はある先入観を持っていることを筆者の経験から述べたい。筆者は過去に同志社女子大学英語英文学科4年次生による *Twelfth Night* の上演の授業を数回担当してきた¹⁾。毎回、苦勞するのは、Viola 役と Sebastian 役に、可能な限り似かよった容姿の学生をキャスティングすることであるが、同時に Sebastian 役には Viola 役の学生より高身長で声が低い学生を選んできた。これは双子とはいえ、Sebastian が男性で Viola が女性であることを考慮した結果であるが、実はオリジナルの台本には、性別の違いからくる二人の身長差や声の違いといったことは全く書かれていない。

むしろその逆であって、男装した Viola と Sebastian は何から何まで瓜二つであり、他人には全く区別がつかないという設定になっている。第5幕の双子の再会場面で、Cesario として男装している Viola と兄の Sebastian を同時に見た Orsino や Antonio は下記

ORSINO

One face, one voice, one habit, and two persons:
A natural perspective, that is and is not.

(*TN* 5.1. 212-213 下線は筆者)²⁾

ANTONIO

How have you made division of yourself?
An apple cleft in two is no more twin
Than these two creatures. Which is Sebastian?

(*TN* 5.1. 218-220)

のように述べて、如何に二人の見分けがつかないかということを強調している。ここで注目すべきは、Orsino の台詞にあるように二人が顔や服装だけではなく、声までもそっくりであるということである。

Shakespeare が *Twelfth Night* の種本にしたと考えられている Barnaby Riche の *Farewell to Military Profession* (1581) の第2話である ‘Of Apolonius and Silla’ にも男女の双子である Silvio と Silla とが酷似していることを述べている箇所

Silvio, who loved his sister dearly as his owne life, and the rather for that, as she was his natural sister, bothe by father and mother, so the one of them was so like the other in countenance and favour that there was no man able to descerne the one from the other by their faces, savyng by their apparell, the one beyng a man, the other a woman.

(Bullough 352 下線は筆者)

があるが、ここでは、二人の顔立ちがそっくりなため服装以外では男女の区別ができないと書かれているだけで、声の同一性については言及されていない。つまり男女の双子が声まだけが同じであるという設定は、シェイクスピアが独自に付け足したものだと考えられる。

また、劇中では、男装した Viola つまり Cesario の女性的な特質について Orsino が指摘する箇所

ORSINO

Dear lad, believe it,
For they shall yet belie thy happy years,
That say thou art a man. Diana's lip
Is not more smooth and rubious; thy small pipe
Is as the maiden's organ, shrill and sound,
And all is semblative a woman's part.

(TN 1.4. 29-34 下線は筆者)

があるが、そこでも Cesario の声が細くて甲高く、少女のようだと述べられている。つまり、Viola は男装していても、その容姿だけでなく、声も含めて女性的であることを隠せないということが指摘されているのだが、その Viola と男性である Sebastian の声が全く同じで区別がつかないという設定になっているのである。

現実には、男女の双子は、幼児のころはともかく、二次性徴が起る思春期以降は二人の外見が見分けがつかないくらい酷似したままということはありえないし、ましてや声まで全く同じということは考えられない。Penny Gay は New Cambridge 版の *Twelfth Night* の Introduction で下記

It is of course, biologically impossible for a girl and boy pairs of twins to be 'identical'. Yet when a story takes this impossibility as the basis of its plot, we have entered the world of romance, a place where it is permissible to play with an idea and see where it leads the imagination.

(23)

のように述べて、男女の双子の完全な同一性は生物学的に不可能であるとした上で、物語が、現実にはあり得ないような設定の元に作られるとき、我々はロマンスの世界に入り込み、そこで想像力を働かせて、そのあり得ない状況を受け入れると述べている。

このように Shakespeare は *Twelfth Night* において、「顔も声も全く同じ男女の双子」という現実にはあり得ない設定をしているのだが、そのような設定が舞台上で具現化される際に重要な役割を果たしたのは当時女役を演じていた少年俳優の存在であることは言うまでもないだろう。男装した Viola の「少女のような容貌や甲高い声」は、変声期前の少年俳優自身の特

徴に他ならない。Shakespeare の劇団にいた「少女のような顔と声をした少年たち」の存在が Viola と Sebastian の人物造形に少なからぬインスピレーションを与えたであろうことは想像に難くない。

17世紀後半の王政復古以降、少年俳優は廃れ、代わって女優が登場し、Viola 役は本物の女性によって演じられるようになる。女性の役は女性が演じるという写実主義が演劇に取り入れられるようになることによって、「顔も声も全く同じ男女の双子」という現実離れした設定は作品を舞台化する上での難しい課題になってくる。

次章では今日 *Twelfth Night* を舞台化する際の双子の配役にはどのような選択肢が考えられるのか、そしてそれぞれの選択肢にはどのような問題点があるのかについて考えていきたい。

II

まず、今日の舞台で最も一般的なのは、Sebastian 役を俳優が、Viola 役を女優が演じるという選択肢だろう。前述したように王政復古以降、女優の登場により、女性の役を変声期前の少年俳優ではなく、現実の女性が優先的に演じるようになる中で、John Ford が下記

One feature of that 'theatrical spectacle' came about through the new convention of "breeches roles" for women. The actress playing Viola or Rosalind could "disguise" herself as a boy by putting on form-fitting breeches that allowed the actress to display her body to a degree that ordinary conventions of dress would not allow. (134)

に述べるように、女優たちが *Twelfth Night* の Viola や *As You Like It* (『お気に召すまま』) の Rosalind といった男装のヒロインを、体の線を露わにするようなズボン姿で演じること ("breeches roles") が、観客の注目を集める

ようになる。

今日、*Twelfth Night* といえば Viola が主人公であるという印象が強いが、本来、この劇の中心的な人物は、Keir Elam が

There is little doubt that in early performances the play's protagonist was the steward. (123)

と述べるように、偽の恋文に騙される執事の Malvolio であり、Malvolio に次いで重要な役どころは Elam が “In later seventeenth-century performances Malvolio may have lost his primacy to Sir Toby” (124) と述べるように、劇中最も台詞の多い飲んだくれの騎士 Sir Toby であった。それが上述した “breeches roles” の流行によって Viola を演じる女優への注目が高まり、劇の比重は Viola に置かれるようになってくる。その結果、*Twelfth Night* は Malvolio や Sir Toby が体現する風刺のきいた性格喜劇としての要素よりも、男装の Viola を中心に Orsino と Olivia が絡むロマンチックな恋愛劇としての要素が前面に押し出される作品になり、その状況が今日に至っている。

今日、*Twelfth Night* を上演する際には、その時々的人气女優が Viola を演じることになるので、キャスティングは Viola 役を優先したものになるため、Sebastian 役とのバランスが崩れるという問題が起こってくる。Sebastian 役には演技力だけではなく Viola 役の女優に似た容姿が必要とされるが、そのような条件を満たす男優を見つけることは極めて難しいだろう。結果として、実際の舞台では似ても似つかない双子が登場する可能性が高くなる。

何よりも劇の終盤のクライマックスともいえる双子の再会場面で、Orsino の発する “One face, one voice, one habit, and two persons” という台詞と観客が舞台上で実際に目にするものの間には大きなギャップが生まれてしまうことは否めない。劇中最も感動を呼ぶ

終幕の見せ場で観客の失笑を買わないためには、双子の外見はある程度は似ている必要があるだろう。その意味で男女のペアの場合は、「顔も服装も声も全く同じ男女の双子」というこの劇のファンタジーとしての根本的な設定を観客に納得のいくものとして提示することは難しいと言わざるを得ない。

一方、上記で述べた男優と女優の組み合わせが持つ問題点を解消し、双子の類似性ということに重きを置いた場合、一人の女優が Viola と Sebastian の両方を演じるという選択肢が考えられる³⁾。これはまさにスター・システムと呼ばれるものであり、当代の人気女優の見せ場を増やすという意味では、興行的に魅力的な試みであるだろう。

しかしながら、この一人二役という試みはその台詞や出番の多さのため演技手に過度の負担を与えると共に、*Twelfth Night* という作品の上演が、主演女優を目立たせるための手段と化してしまうという問題点があるのではないだろうか。

女優が Viola と Sebastian の二役を演じ分ける場合、より難易度が高いのは Sebastian 役であることはいうでもない。その意味でより観客の興味を引くのは、皮肉なことというべきか Viola よりもむしろ Sebastian の登場場面であるとも言える。そしてその際に観客の意識は当然ながら劇中人物の次元ではなく、現実の舞台上で男性に扮する女優そのものによりダイレクトに向かうことになるだろう。劇世界の次元よりも舞台上の特定の演技手の方に関心に向けすぎると、多様な個性を持った登場人物の織り成すポリフォニックな群像劇としてのこの作品の豊かさを味わうことが二の次になってしまう。主演女優に比重を置きすぎることによって観客の舞台経験は皮相なものになってしまうのではないだろうか。

更に Viola と Sebastian の一人二役は、終盤の再会場面の演出にも問題が出てくる。5幕1場で互いに亡くなったと思いついていた双子の片割れによりやく出会えた Sebastian と

Viola は以下のようなやり取り

SEBASTIAN [*Sees Viola.*]

Do I stand there? I never had a brother,
Nor can there be that deity in my nature
Of here and everywhere. I had a sister,
Whom the blind waves and surges devoured.
[*to Viola.*] Of charity, what kin are you to me?
What country man? What name? What parentage?

VIOLA

Of Messaline. Sebastian was my father,
Such a Sebastian was my brother too;
So went he suited to his watery tomb.
If spirits can assume both form and suit,
You come to fright us.

(TN 5.1. 222-232)

を交わすのだが、このやり取りは前述したように劇中最も心を打つ箇所であり、優れた演出であれば、観客は涙するはずである。

一人二役の場合、よく行われるのがどちらか一方の役に替え玉を使うことであるが、その場合、替え玉の女優の顔ができるだけ見えないよう観客に背を向けさせたりするような演出がなされることが多い。しかしながらそのような歌舞伎でいうところの「けれんみ」とも呼べる工夫は観客を面白がらせることはできても、感動させることは難しいのではないだろうか。

舞台上で俳優が一人二役をすることの効果について、Christie Carson は2009年にGlobe座で上演されたRebecca Gatwood演出の*Comedy of Errors*を例に挙げ、終幕における双子の再会場面で一人の俳優が双子を演じる際に、自らの等身大の切り抜きを舞台に置くことによって双子の片割れを表すという仕掛けについて下記

The Globe touring production, the same actor played both parts using a cut-out image of himself to stand in

for the character that was not speaking. While this second solution avoids the difficulty of making the characters' identicalness believable, it shifts the audience's attention from the progress of the story to the appreciation of the actor's virtuoso performance. This, I would argue, illustrates that any attempt at visual realism in fact takes away from the audience's pleasure of collectively suspending disbelief. The presentation of the scene at the Globe become clever rather than involving.

(73 下線は筆者)

のように説明している。Carson はこのような仕掛けは観客の関心を劇の進行ではなく、俳優の離れ業に向けさせてしまうことになり、双子の同一性を強調するために視覚に訴える写実主義は観客が劇世界の虚構を真実として楽しむことを妨げるのではないかと述べている。そしてそのような演出の仕方は巧妙ではあるが観客を劇世界に引き込むことにはならないのではないかと示唆している。

Carson が示唆するように、舞台上の巧妙な仕掛けは観客に知的な反応を起こさせることはできても、観客の心を動かすことは難しいだろう。これは*Twelfth Night*の終幕においても同様である。

Virginia Woolf は、*Twelfth Night*の劇評において、下記

Perhaps the most impressive effect in the play is achieved by the long pause which Sebastian and Viola make as they stand looking at each other in a silent ecstasy of recognition. (35)

のように述べて、双子の再会場面で最も感動を

与えるのは、顔を合わせた双子が台詞を言う前にただ立ち尽くして互いに見つめ合うその「長い間」にあるとしている。

Woolf が述べるように、この場を盛り上げるためには双子が見つめ合う「間」が何よりも重要になるだろう。ここはある意味、ストップモーションのように時間の流れが停止する場面であり、ここで観客もまた舞台上で互いの顔を凝視する双子をそれぞれ見つめることによってそれまでの人違いがもたらした混乱がようやく解決に至る瞬間の感動を十分に味わうことができる。

そのように重要な場面において、双子の一方にその場だけの代役が使われると、双子の対等なバランスが崩れ、ある意味興ざめになると言わざるを得ない。そもそも双子が一人二役で演じられた場合、再会場面に立ち会う観客の関心は双子の再会という劇世界の成り行きよりも、どのようにして双子を舞台上に登場させるのかという演出上の工夫の方に向いてしまうだろう。このように双子の同一性にこだわる一人二役の演出は最終場面の感動を損なうものになってしまう可能性がある。

以上のように、今日の舞台で一般的に見られる女優を中心とした *Twelfth Night* の双子の配役が持つ問題点を指摘してきた。「顔も声も全く同じ男女の双子」という設定は、女優と男優の組み合わせによってあるいは女優の一人二役によっては効果的に具現化することは難しいと言える。

そのような中で近年では、Shakespeare 当時の演劇状況への回帰とも呼べる男優のみの上演が数多くなされている。次章では、そのような男優による双子の配役という選択肢を取り上げ、そこから更に Shakespeare 当時の配役についても探っていきたい。

III

Shakespeare 劇を可能な限り当時の形で再現しようという試みは近年盛んになっているが、その中でも特に注目されたのが2002年にロンド

ンのミドル・テンプル法学院とグローブ座で上演された Tim Carroll 演出の男優のみによる *Twelfth Night* であろう。

Carroll の舞台では、Viola と Sebastian を若い男優 (Viola 役を20歳の Eddie Redmayne、Sebastian 役を26歳の Rhys Meredith) が演じることで、オリジナルテキストにある「顔も声も服装も全く同じ男女の双子」という設定に近づくことができていると言える。Keir Elam はこの異性装による舞台の観客への効果について下記

One of the real advantages of this generalized cross-dressing was that it allowed the audience to accept quite happily what often seem improbable fictions, beginning with the mistaken identity of the twins; (113)

のように述べ、双子がどちらも男優に演じられることによって、現実離れた設定を観客が無理なく受け入れることができると指摘している。もちろんこの二人は本当の双子ではないので、素顔はそれほど似ているわけではないが、この双子の配役で注目すべきは、エリザベス朝時代を忠実に再現した凝った衣装とヘアスタイルに加えて、歌舞伎役者を思わせるような白塗りのメイクアップをすることによってかなり似通った外見が作り出せているということである。

James C. Bulman はこの上演について下記

Ordinarily productions must finesse the similitude: where the text requires Cesario to be repeatedly mistaken for Sebastian and vice versa, in modern performances it is always a stretch for the audience to imagine that the actress playing Cesario could possibly be mistaken for the actor playing her brother, who typically is taller, broader, his voice deeper, his

musculature more developed. In the Elizabethan theater, Cesario and Sebastian would, as played by adolescent boys, presumably have been more easily mistaken for one another. In the Globe production, too, Sebastian was readily taken for Cesario's twin: the two actors were of nearly identical build, their faces and voices similar, their costumes the same. (582 下線は筆者)

のように述べ、今日一般的な男優と女優のペアによる双子の配役では観客が二人が見分けがつかないくらい酷似していると想像するには無理があるが、エリザベス朝の舞台では、双子の役をどちらも少年俳優が演じていたためにそのような想像ははるかに容易だったであろうこと、そしてグローブ座の上演においてもまた、体格も顔も声も似た男優が同じ衣装を身につけることによって当時と同様に双子の見分けがほとんどつかなかったと結論付けている。

Bulman は Carroll の舞台における若い男優による双子の配役がエリザベス朝の少年俳優が観客に与えたのと同じ効果をもたらしていると指摘しているのだが、ここで筆者が注目したのは、Bulman が Shakespeare 当時、Viola と Sebastian を共に少年俳優が演じていたと考えていることである。筆者自身も前述したように、「顔も声も全く同じ男女の双子」という設定を舞台上で最もそれらしく具現化できるのは変声期前の少年俳優であると考えている。もしも当時、似かよった容姿の二人の少年俳優が実際に双子を演じていたとしたら、Shakespeare がテキストで提示したことがかなり忠実に舞台化されていたことになる。

しかしながら従来、エリザベス朝の舞台では女性の役は少年俳優によって、男性の役は成人俳優によって演じられたと考えられている。それ故、双子の配役は Bulman の見解とは異なっていた可能性もある。例えば、T. King は

Sebastian 役は成人俳優が Viola 役は少年俳優が受け持っていたと考えている (204)。もちろん少年俳優と言っても、残された記録から推測される彼らの実際の年齢は12歳頃～22歳頃までと幅広く、成年に達した後も女役を演じていたと思われる例もある⁴⁾が、いずれにせよ、Viola を少年俳優が演じ、Sebastian を成人俳優が演じたのであれば、そこには少なくとも年齢差からくる体格や声の違いが生まれる可能性が高い。

T. A. Baldwin は実際に双子を演じた俳優を当時の劇団のメンバーの中から推測している。Baldwin は、Viola を演じたのは、Ned という名前で記録されている俳優であり、Sebastian を演じたのは William Sly (? -1608) だとしている (228)。Ned が誰であったのかについてははっきりしたことは分かっていないが、Baldwin は Shakespeare の実弟である Edmund Shakespeare (1580-1607) の可能性が高いとしている (419)。もし Viola 役が Edmund Shakespeare であれば、*Twelfth Night* の初演年とされる1602年頃には、22歳に達しており、少年俳優としては上限ぎりぎりの年齢であることになる。

一方、William Sly の生年は不明であるが、1592年頃に上演されたとされる *The Seven Deadly Sins* という劇の配役表で Porrex という男性役を演じていた記録 (Baldwin 251-2) から、その頃にはどんなに若くても20歳には達していたと考えられる。そこから逆算すれば、Sly は1570年前半の生まれであろうと推測できる。*The Seven Deadly Sin* の上演年については1597～8年頃であるという説⁵⁾もあり、後者であれば、もう数歳若い可能性もある。いずれにしても Sebastian 役は20代後半～30歳前後の俳優によって演じられたことになる。

もしも Baldwin の推測が正しければ、当時の観客が実際に舞台で目にした双子の姿はどちらももはや少年とは呼びにくく、台本で提示されている「甲高い声を持ち、少女の顔をした男装の Viola と、彼女と同じ顔と声を持つ双子の兄 Sebastian」という設定との間には少な

らぬ相違があったことになる。初演の双子はもしかしたら2002年のCarrollの舞台における双子よりも年長であった可能性もある。

Anne Bartonもまた、当時の実際の双子の配役は台本が示すほどには似ていなかったであろうということを、Shakespeareと同時代の劇作家Ben Jonson(1572-1637)との比較において、それぞれの劇作家が瓜二つの双子という設定を舞台化することへの姿勢の違いを例に挙げ、論じている。BartonはJonsonの劇作の姿勢について、彼の友人William Drummondの日記に残された言葉

he [Jonson] had an intention to have made a play like Plautus Amphitrio but left it of, for that he could never find two so like others that he could persuade the spectators they were one (Herford and Simpson 144)

を引用し、Jonsonはローマ時代の劇作家Plautus(250?-184? B.C.)の*Amphitrio*のような瓜二つの双子が登場する作品を書きたいと思ったけれど、観客を納得させるほどそっくりな俳優を二人見つけることは決してできないからあきらめたということを紹介している(29)。

BartonはそのようなJonsonの選択について下記

Elizabethan actors did not, of course, wear masks. They performed, moreover, in close proximity to the audience, usually in full daylight. Jonson's hesitation is entirely understandable. (29)

のように述べて、仮面をつけていたローマ時代の役者とは異なり、エリザベス朝時代の役者は近距離で素顔を観客にさらさないといけないうのでJonsonがそういう設定の芝居を無理だと考えるのも理解できると述べている。次いで

BartonはShakespeareについて下記

Yet Shakespeare, when faced with exactly the same problem, treated it with joyous unconcern. (29)

のように述べ、ShakespeareはJonsonとは対照的に同じ問題に直面しても躊躇しなかったとしている。ShakespeareはPlautusの*Amphitrio*を下敷きに*Comedy of Errors*を書き、その中で瓜二つの双子を原作の設定を変えて二組にしているが、Shakespeareのそのような態度を、Bartonは下記

Shakespeare simply did not care that his two Antipholuses and his two Dromios were not visibly identical on stage in the manner demanded by his plot. In a comedy largely concerned with the transformations effected by the mind, he was perfectly willing to let this blatant theatrical incongruity take its place in the argument of the whole. (29)

のように述べ、台本で示されていることと舞台上で具現化されているものとの間に歴然とした不一致が起こることを全く気にしていないと示唆している。

Bartonは更に下記

In *Twelfth Night*, a few years later, Shakespeare remained unabashed by the practical stage problems attendant upon any plot involving twins. (30)

に述べるように、Shakespeareは*Twelfth Night*においても双子が酷似していることを舞台でどのように演出するかという問題についても戸惑うことはなかったとしている。そして続

けて下記

Most members of the theatre audience must always have been more struck by the dissimilarity in appearance of these supposedly identical twins than by the likeness the other characters hail as so miraculous. (30)

のように述べ、舞台の上の Viola と Sebastian には他の登場人物が口にするほどの驚くような類似性はなかったはずだと指摘している。

Barton によれば、Shakespeare は下記

Far from trying to minimize the inevitable discrepancy between verbal statement and visual fact, Shakespeare calmly directed the attention of the entire theatre to it. (30)

に述べられているように、台詞で述べられることと視覚的な事実との間の避けられない不一致を最小限にしようとするどころか、むしろそこに観客の注意を向けているのだと結論付けている。

以上の Barton の論考からは、台本に書かれたことを舞台上に文字通り忠実に再現する写実主義に徹した Jonson とは対照的に、Shakespeare は見た目の不一致をむしろ積極的に利用し、観客の想像力で補うような舞台作りを目指していたことが分かる。

Shakespeare は自分の属する劇団の俳優の個性に合わせて役を書いたと言われるが、台本の中で強調される Viola の声の高さ、そして彼女と全く同じ顔と声の Sebastian という設定は現実の俳優によって具現されたものとそれほど一致はしていなかった可能性が高い。*Twelfth Night* の初演における実際の配役については未だ推測の域を出ないが、2002年のグ

ローブ座の配役以上に Viola と Sebastian の見た目は異なっていたのかもしれない。

結論

Shakespeare の戯曲には妖精や魔法使いといった非現実の存在が登場するものが少なくない。*Twelfth Night* においても超自然的な存在ではないにせよ、現実にはあり得ないような設定の双子を登場させ、見た目の写実主義にとらわれず、観客の想像力に訴えるような舞台を作ろうとしていたことが伺える。そのような Shakespeare の意図を今日の舞台で具現化するためにどのような演出が効果的なのかは簡単に答えの出せない難しい問題であるが、少なくとも Viola 役に女優を配し、そこに比重を置くような今日の一般的な演出以外の選択肢についても広く探っていく必要があるだろう。例えば、前述した Tim Carroll 演出の舞台の意義は、筆者からすれば、Shakespeare 時代の状況に忠実であるということよりもむしろ、衣装やメイクアップを工夫すれば、俳優であれ女優であれ、同じ背丈と体格の同性の俳優を二人配することによって、良く似た男女の双子という設定を異性装の面白さを取り入れながら具現化できることを示唆している点にある。

そもそも今日のシェイクスピア上演において、女優が演じるのは女性の役に限られるということ自体が貧困なる写実主義であり、ジェンダーの枠にとらわれた前時代的発想であるだろう。また一方で、双子の類似性を強調するために一人の俳優が二役を演じるという選択肢も別の意味で皮相的な写実主義であり、Shakespeare が最も重視した観客の想像力に訴えるという意図からは大きくかけ離れていると言えるだろう。これからのシェイクスピア劇の配役には性別や見た目の写実主義だけにとらわれない、また過去の慣習の忠実な再現だけに頼らないより柔軟な視点が必要であろう。

劇の上演とは紙に書かれた二次元の台本を俳優の肉体を通して三次元に立ち上げる作業であるが、その俳優が異なれば、作品の印象は全く

違ったものになる。その意味でシェイクスピアのテキストは、過去の硬直した古典ではなく、これからも次々と新しい解釈を生み出すことのできる変幻自在な素材であると言えるだろう。

本稿は関西シェイクスピア研究会4月例会(2021年4月25日、オンラインで開催)において、「*Twelfth Night*における双子の配役について」というタイトルで口頭発表を行った時の原稿を元に、加筆・修正したものである。

注

- 1) 筆者が担当した同志社女子大学英語英文学科4年次生による *Twelfth Night* の上演は1997年度、2011年度、2021年度の3回である。
- 2) Keir Elam, editor, *Twelfth Night or What You Will* (The Arden Shakespeare, third series, London: Cengage Learning, 2008) p.338.
以下、本稿中の *Twelfth Night* からの引用は全てこの版に拠る。
- 3) 日本では女優だけではなく、歌舞伎俳優が Sebastian と Viola を若衆役と女形の一人二役で演じる試みもあることを補足しておく。
- 4) Shakespeare 時代、舞台に立っていた少年俳優の年齢については David Kathman, “How Old were Shakespeare’s Boy Actors?”, *Shakespeare Survey* 58 (2005), pp.220-46. を参照。
- 5) *The Seven Deadly Sins* の上演年について、Baldwin の本には1592年と記載されているが、Andrew Gurr は1591年頃とし、Kathman は1597~8年の可能性を示唆している。Andrew Gurr, “The Work of Elizabethan Plotters, and 2 *The Seven Deadly Sins*,” *Early Theatre* 10.1, (2007), pp.67-87. 及び David Kathman, “*The Seven Deadly Sins* and Theatrical Apprenticeship,” *Early Theatre* 14.1, (2011), pp.121-139. を参照。

引用文献

- Baldwin, T. W. *The Organization and Personnel of the Shakespearean Company*. New York: Russell and Russell, 1961.
- Barton, Anne. *Ben Jonson: Dramatist*. Cambridge UP, 1984.
- Bullough, Geoffrey, editor. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol.2. London: Routledge, 1958.
- Bulman, James C. “Queering the Audience: All-Male Casts in Recent Productions of Shakespeare.” *A Companion to Shakespeare and Performance*, edited by Barbara Hodgdon and W. B. Worthen. Blackwell, 2005. pp.567-87.
- Carson, Christie. “Visual Scores.” *Shakespeare and the Making of Theatre*, edited by Stuart Hampton-Reeves and Bridget Escolme. Palgrave Macmillan, 2012. pp.69-87.
- Elam, Keir, editor. *Twelfth Night or What You Will*. (The Arden Shakespeare, third series) London: Cengage Learning, 2008.
- Ford, John R. *Twelfth Night: A Guide to the Play*. Greenwood, 2005.
- Gay, Penny. “Introduction.” *Twelfth Night or What You Will*, edited by Elizabeth Story Donno. (The New Cambridge Shakespeare, third edition) Cambridge UP, 2017. pp.1-62.
- Gurr, Andrew. “The Work of Elizabethan Plotters, and 2 *The Seven Deadly Sins*.” *Early Theatre* 10.1, 2007, pp.67-87.
- Herford C. H. and Percy Simpson, editors. *Ben Jonson, Vol.1: The Man and His Works*. Oxford: Clarendon, 1954.
- Kathman, David. “How Old were Shakespeare’s Boy Actors?” *Shakespeare Survey* 58, 2005, pp.220-46.
- Kathman, David. “*The Seven Deadly Sins* and Theatrical Apprenticeship.” *Early Theatre* 14.1, 2011, pp.121-139.

King, T. J. *Casting Shakespeare's Plays: London Actors and their Roles, 1590-1642*. Cambridge UP, 2009.

Lothian, J. M. and T. W. Craik, edits.

Twelfth Night or What You Will. (The Arden Shakespeare) Routledge, 1988.

Woolf, Virginia. *The Death of the Moth and Other Essays*. London: Hogarth, 1942.